

## 1. 略歴

1979年4月	九州大学文学部 入学
1983年3月	同大学同学部英語学英米文学専門課程 卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程 入学
1986年3月	同大学院同研究科同専攻修士課程 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程 入学
1988年3月	同大学院同研究科同専攻博士課程 中退
1988年4月	東京女子大学文理学部英米文学科 専任講師
1992年4月	同大学同学部同学科 助教授
1993年9月	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 フルブライト交換研究員（～1994年9月）
1997年4月	立教大学文学部英米文学科 助教授
1999年4月	同大学同学部同学科 教授
2003年9月	ノースカロライナ大学チャペルヒル校 交換研究員（～2004年9月）
2007年4月	立教大学文学部文学科英米文学専修 教授
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

## 2. 主な研究活動

### a 専門分野

アメリカ文学、特にアメリカ南部文学

### b 研究課題

アメリカ南部文学の総体的特徴のひとつとして「戦後性」に着目し、ドイツの文化史家ウォルフガング・シヴェルプッシュが2002年に唱えた「敗北の文化」の概念を枠組みとして、日本の近代文学、あるいは所謂「戦後文学」との相対的比較を行う。

### c 概要と自己評価

2005年に出版した著書『敗北と文学——アメリカ南部文学と日本近代文学』においてその概要を提示した、19世紀中葉の南北戦争以降の「敗北の文学」としてのアメリカ南部文学と、所謂「戦後文学」を含む日本近代文学の比較検討に関するおおまかな定式ないし視座にしたがって、対象となる両文学それぞれのより細かい時代区分における比較検証を継続的に行っている。

2020年度は科研基盤研究C「戦後の思考」の文学的ディレンマについて——アメリカ南部文学と日本近代文学の相違」を取得、その初年度にあたっており、南部文学における開花期（20世紀第1四半世紀から第2四半世紀までと目される）前後に活躍した作家たちのうち、特に女性作家、たとえばKate Chopin、Ellen Glasgow、Eudora Welty、Zora Neale Hurston、Lee SmithさらにBobbie Ann Masonらの作物を集中的に取り上げ、南部という「敗北の文化」圏にすぐれた女性作家が多く輩出した歴史的・文化的背景について検討した。

2021年度も上記研究計画にのっとり、19世紀後半、Mark Twain（もともと初期の本格的南部作家）と同時代に活躍し、Twainに比して研究対象として昨今、必ずしも情熱的な対象とは目されなくなったGeorge Washington Cable、Twainとは対症的にきわめて南北戦争従軍後、政治姿勢を明確に「反南部」へと転向させた作家の作品のうち、その戦後の思考の文学化として特に注目すべきJohn March, Southernerを取り上げ詳細に吟味するとともに、一転、南部文学21世紀の作物のうち注目すべきものを複数（Jesmyn Ward、Ron Rash、Kevin Wilsonなど）取り上げてその最新動向を検討した。

20年度、21年度ともに日本文学については島崎藤村をはじめとする近代文学草創期の作家に加え、小島信夫、三島由紀夫、大江健三郎、村上春樹などのいわゆる「戦後文学」に関してさらに知見を深めるよう意を用いた。また21年度後半からは、先の「無条件降伏」により「大日本帝国」の瓦解によって消滅し、以降、日本の戦後史において閑却される傾向のあった旧帝国領地（満洲あるいは朝鮮半島など）の文学状況を朴裕河ならびに加藤聖文の先行研究に依拠しつつ着目することにより、より重層的な戦後文化の様相を検討する可能性について追究することが、戦後日本に関して注目すべき発言を行ってきた思想家（たとえば橋川文三、竹内好、吉本隆明、柄谷行人など）を再評価する契機を提供しうるか、考量継続中である。

以上の研究成果は以下に記したような論文・学会発表等に反映されている。

#### d 主要業績

##### (1) 著書

共著、竹内理矢・山本洋平編、後藤和彦ほか 58 名、『深まりゆくアメリカ文学——源流と展開』、ミネルヴァ書房、2021.4

共編著、巽孝之監修、下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編、『脱領域・脱構築・脱半球——二一世紀人文学のために』、小鳥遊書房、2021.10

##### (2) 論文

後藤和彦、「女・性と歴史—『響きと怒り』と『或る女』より」、巽孝之監修、下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編『脱領域・脱構築・脱半球——二一世紀人文学のために』（小鳥遊書房）所収、374-91 頁、2021.10

後藤和彦、「サムとリヴィ、「マーク・トウェイン」とエルマイラ」、『フォークナー』、第 24 号、29-41 頁、2022.4

##### (3) 書評

Benjamin Griffin, ed., 『Mark Twain's Civil War: The Private History of a Campaign That Failed』、U of California P, 『マーク・トウェイン——研究と批評』、第 20 号、51-55 頁、2021.6

##### (4) 学会発表

国内、後藤和彦（司会・講師）、佐々木徹・佐藤泉・藤井光、「小説家と歴史——認識と方法、解釈と欲望」、日本英文学会、オンライン、2021.5.23

国内、後藤和彦・相田洋明（司会）・城戸光世・梶原照子、「作家とその妻／夫」、日本ウィリアム・フォークナー協会、オンライン、2021.9.11

##### (5) 啓蒙

後藤和彦、『ハックルベリー・フィンの冒険』とふたつの自由、『図書館教育ニュース』第 1528 号付録、p.1、2020.4

##### (6) 監修

後藤和彦、『はるかな川に自由を求めて』、少年写真新聞『図書館教育ニュース』第 1528 号、2020.4

#### 3. 主な社会活動

##### (1) 他機関での講義等

立教大学大学院文学研究科、「米文学特殊研究」、2017.4～現在

東北学院大学大学院文学研究科、「現代英米文学演習」、2020.8、2021.8

##### (2) 学会

国内、日本英文学会評議員、2017.4～2021.3

国内、日本アメリカ文学学会副会長、2018.4～2022.3

国内、日本アメリカ文学学会会長、2022.4～現在

##### (3) 学外組織

国内、日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）、審査委員長、2020.9～現在